

『名人伝』に見る技術と知恵の伝承

将棋の八大タイトル戦の中で最も長い歴史を誇る「名人戦」が、この4月より開幕する。今期の名人戦では、藤井聡太七冠が三連覇の偉業に挑む。果たして「名人」とは何か…そう考えたとき、ふと中島敦の『名人伝』が脳裏に浮かんだ。

『名人伝』は、弓の達人を目指す男・紀昌の話である。師・飛衛の元で壮絶な鍛錬を重ね、遂に弓の奥義秘伝を伝承されるが、習得するや否や邪念に取り憑かれる。飛衛の機転により新たな目標を得た紀昌は、霍山の甘蠅かんよう老師を尋ね、そこでこれ迄とは次元の異なる「不射之射」を目の当たりにし、改めて修行に入る。

9年後、山を降りてきた紀昌の姿を見て、都の人たちは驚愕するのである（物語の前半）。

中島敦の遺作であり、数多の研究論文が発表されているこの『名人伝』は、「技術伝承の必要性和難しさ」について、多くの示唆を暗示していると私は思う。ここでは建設業の技術と知恵の伝承の視座から読み解いてみたい。

私たちの社会を支えるインフラは、長年にわたり先人たちが積み重ねてきた建設技術によって支えられている。こうした高度な技術は一朝一夕に身につくものではなく、長年の経験と試行錯誤を経て磨かれるものであり、その技術を伝承するには「継ぐ側」と「継がせる側」の双方に努力と工夫が求められる。

「継ぐ側」には、学ぶ姿勢と忍耐が必要だ。『名人伝』の主人公の如く（極端なことはさておき）、ひたむきに技を磨くことが不可欠である。一方、「継がせる側」にも工夫が求められる。かつての様にただ「見て覚えろ」と突き放すだけでは、今の若者には響かない。相手の理解度を見極めながら、段階的に教え、成功体験を積ませることが重要だ。

同時に、技術を習得する上では謙虚さが重要である。建設技術の師は何も人間だけではない。自然や国土といった全てが学ぶべき対象である。どれだけ技術が進歩したところで、自然災害を完全に回避したり、地形・断層の難所を完全に克服したりすることはできない。最先端の技術を習得したとしても、それに驕ることなく、自然や国土に敬意を持って技術の発展・活用を進めるべきである。

加えて環境の「変化」にも柔軟に対応することが必要である。主人公の紀昌も、安定した足場では遺憾無くその技術を発揮出来るものの、霍山の断崖絶壁から宙に乗り出した不安定な岩場の上では、弓を引くどころか、立つことすらできなかった。

現在、建設業界は深刻な構造的課題に直面している。若年技術者の不足と熟練技術者の高齢化が進み、業界の基盤そのものが揺らぎつつある。特に本年、第一次ベビーブーマー世代がすべて75歳を超えることから、長年培われてきた貴重な技術と知恵が失われる危機に直面している。



国土交通省 大臣官房 技術審議官 **くつかけ としお**
沓掛 敏夫

これらを早急に次世代へと継承しなければ、我が国の建設技術の根幹が損なわれる恐れがある。

こうした状況下においては、従来の手法に固執するのではなく、時代の変化を見据えた技術の革新が不可欠である。現在、建設現場におけるデジタル技術の進展は著しく、i-Construction2.0、BIM/CIM、AIなどの最先端技術の導入が進められている。さらに、設計・施工・管理に至る全てのプロセスに変革をもたらすDXの潮流も本格化しつつある。

紀昌が甘蠅老師の「不射之射」によって弓術の真髄を悟ったように、現代の建設業においても、進化し続ける技術を巧みに活用しながら、伝承の在り方を熟考することが求められている。

こうした取組を円滑に進めるためには、国家としても積極的な支援を講じる必要がある。教育機関や研修施設との連携を強化し、技術者のキャリアパスや処遇の改善を図ることも、持続可能な技術伝承のための重要な要素である。建設業界の未来を担う次世代に対し、いかにして高度な技術と知恵を受け継がせるか——その問いに答えることこそが、今まさに求められているのである。

さて、物語の後半で紀昌は天下一の弓の名人として、その名声は雲と立ち^い曇めるが、決して弓を引かないのである。それどころか、晩年の紀昌は弓そのものの存在すら忘れてしまう。そして、そ

れを聞いた都の人たちは「画家は絵筆を隠し、楽人は瑟^{しつ}の弦を断ち、工匠は規矩を手にするのを恥じた」と語られ、物語は幕を閉じる。

思うに、この物語は、技術とは単なる「型」だけではなく、そこに込められた「精神」こそが核心であることを示唆しているのではないだろうか。その精神を学ぶことなく、単に型だけを真似すれば、本当の意味での技術を絶やしてしまいかねないと、名人伝の最後は語っているかのようだ。

建設業においても、技術の伝承は単なる手順やマニュアルの継承だけではない。熟練の職人が培ってきた「勘」や「こつ」、さらには「誇り」といった目に見えないものこそが、本当の意味での核心である。これを正しく伝承することにより、強靱で持続可能なインフラを築き上げ、社会の安全安心を確保し、経済の基盤を強化していく…これこそが、私たち世代が次の世代に伝え、残すべきものではないかと思う。

紀昌が壮絶な鍛錬の末に悟った弓の名人とはいかなるものであったのか。そんなことを考えながら、今年の名人戦を見てみたいと思う。

【著者紹介】沓掛 敏夫（くつかけ としお）

昭和42年生まれ。京都大学工学部土木学科卒。国土交通省道路局企画課経済調査室長、九州地方整備局道路部長、道路局高速道路課長、同局企画課長等を経て現職。